

数学と行政の間で生きる

厚生労働省数理職員を目指される皆さま、はじめまして。自分は、平成22年に入省し10年間数理職員として勤務してきました。経験してきた配属先については、経歴欄にある通りです。各部局の紹介については、ここまでのページに譲るとしまして、ここでは、将来後輩となり得る方々に向け、私個人の経験から、正直な所感を書いていきたいと思えます。

《10年間の感想》

この職業に就いて何より感じたのは、責任の重さです。たとえ2年目や3年目でも、自分の分析内容や説明が政府の見解にさえなります。その上、ひとつひとつの仕事に対して、割かれる人材は思いのほか少なく、チームで相談して取り組むということはほとんどありません。特に数理職員は、国家公務員の中でも人数が少ないため、配属先に自分以外の数理職員がいるとは限りません。「何が正しいのか」を自分で考え、論理的に検証し、判断していく必要があります。

《仕事の流れ》

仕事の流れは、どこにいても共通しているところがあり、配属先が変わればテーマは変わりますが、「計算や分析をする」→「報告書や説明資料を作る」→「上席へ説明(=組織の方針決定)」→「報告書の公表や提出」というのが基本的な工程です。

《残業について》

当然ですが、どのような仕事でも期限内に行う必要があります。案件によって期限は様々で、数か月かけて計画的に行うものもあれば、期日まで1週間というものや、案件によっては翌朝までという急ぎのものもあります。突発的な案件については、日々の業務量をマネジメントすることができないため、所定時間外に仕事をしなければなりません。常に忙しいということではありませんが、忙しい時期は、毎日終電帰りということもありますし、特に大変なときには、週に数日徹夜となることや休日返上で仕事をすることもあります。

《仕事のやりがい》

「数学的な素養が求められること」と「行政として社会機能に資すること」のインターセクションにある、というのが、この仕事のやりがいだと自分は考えています。

最近、行政機関では「EBPM」という、一般の方にはあまり馴染みのないだろう言葉がよく使われています。Evidence-Based Policy Making (=証拠に基づく政策立案)の頭文字で、政策の企画にあたって、その必要性や効果を、統計数字などの合理的な根拠に基づいて示すことを推進しているものです。数学でいえば証明、科学でいえば実験による裏付けといったところでしょう。こうした根拠を示す際、数字を取り扱うにあたっては、それがどのように算出されているのか理解していることが必要です。自分の経験した仕事でも、年金経理における「責任準備金」の算定や統計における「季節調整」などは、少し計算が複雑で、やはり数学的な素養が一定程度必要だと感じます。

また、この職業は、経済的な仕事ではなく、収益を上げることを目的とはしていません。友人から「何のために仕事をしているのか」と聞かれることもありますが、自分は「正義のために」と答えます。「儲かること」を抜きにして「(道徳的に)正しいこと」を目指して仕事をできるのは、行政という立場の特徴でしょう。

おそらく他の職業にはあまりないこうしたところに興味があれば、厚生労働省数理職員を目指すことも一考の価値があると思えます。

職業安定局雇用政策課
中央労働市場情報官

森口 大輔



《経歴》

年金局事業企画課調査室
内閣府政策統括官(経済財政分析
担当)付参事官(総括担当)付
国民年金基金連合会 を経て現職